

# 英語の右方移動構文の構造と派生について

中 郷 慶

## On the Structure and the Derivation of Rightward Movement Constructions in English

Kay Nakago

### 0. はじめに

いわゆる、右方移動構文として知られているものには、次の(2)と(4)に見られるものがある。名詞句からの外置 (extraposition from NP) という移動操作によって (1a-b) から (2a-b) が派生されると一般的には考えられてきた。

- (1) a. A man with blue eyes came into the room.
- b. John met a man who was from Philadelphia at the party.
- (2) a. A man came into the room [with blue eyes].
- b. John met a man at the party [who was from Philadelphia].

また、(4a-b) は重名詞句転移 (heavy NP shift) によって、(3a-b) から派生されたものであるとされる。

- (3) a. He attributed the fire which destroyed most of my factory to a short circuit.
- b. He threw the letter which he had not decoded into the wastebasket.
- (4) a. He attributed to a short circuit [the fire which destroyed most of my factory].
- b. He threw into the wastebasket [the letter which he had not decoded].

(Ross 1986: 34)

この論文の目的は、重名詞句転移や名詞句からの外置の分析を通して、右方移動構文の構造と派生を明らかにすることである。この論文の構成は以下の通りである。1節では、従来、移動

によって生成されたと考えられてきた名詞句からの外置が、移動によらないものであるという主張を見る。2節では、重名詞句転移が移動によらないということを、Chomsky (1993)以降のミニマリスト・プログラム (Minimalist Program) の枠組みの点からも議論し、その生成の仕組みを提案する。3節では、いわゆる右方移動構文としてこれまで見なされてきた名詞句からの外置と重名詞句転移に対する、統一的な認可条件を考察することにする。4節はまとめである。

## 1. 右方「移動」は移動であるのか

いわゆる右方移動構文として知られている名詞句からの外置や重名詞句転移は、基底の位置から、要素が右方に移動することによって派生されると、一般的に分析されてきた。しかしながら、そのような分析に対する反論がいくつかある。この節では、右方移動構文のうち、名詞句からの外置が実際は移動によらないという主張を見ていくことにしたい。

### 1. 1 名詞句からの外置の「着地点」

まずはじめに、外置句が構造上どの位置を占めているのかについて、明らかにしておく必要がある。名詞句からの外置は、一般的に移動によって生成されると主張されてきた。そして、これまでに多くの研究によって、主語から外置された要素はIPに付加され、目的語から外置された要素はVPに付加されると考えられてきた<sup>1)</sup>。このことは、VP前置 (VP-preposing) やVP削除 (VP-deletion) のテストを用いることによって明らかになる。次の例を見てみよう。(5)はVP削除の例である。

- (5) a. \* A man came into the room with blond hair, and a woman *did so*, too.  
(≠came into the room with blond hair)
- b. John read a book over the summer by Chomsky, and Mike *did so*, too.  
(=read a book over the summer by Chomsky)

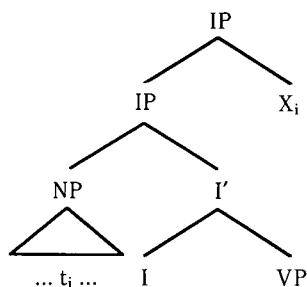
一般的に、do soはVP内の要素のみを置き換えることができる。(5a)では、*did so*は、*came into the room*のみを指し、主語からの外置要素 *with blond hair* を含まない。それに対して、(5b)では、目的語からの外置要素 *by Chomsky* は *did so* の要素の中に含まれる。したがって、このことから、主語からの外置要素はVPの外にあり、目的語からの外置要素はVPの中にあることが示される。次に、VP前置の例である(6)を見てみよう。

- (6) a. \* John said a man appeared yesterday with blond hair, and *appeared yesterday* with blond hair a man did.

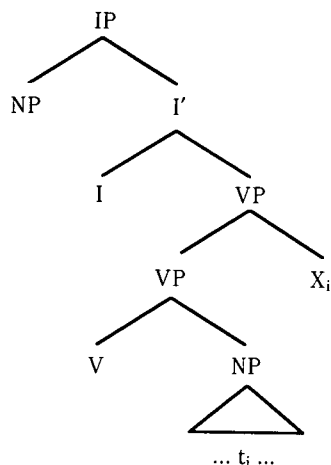
- b. John said he would meet a man at the party from Chicago, and *meet a man at the party from Chicago* he certainly did.

VP前置という操作では、VPの要素のみを前置することが可能である。(6a)の非文法性は、主語からの外置要素 *with blond hair* をVP *appeared yesterday* とともに前置したことによると言える。一方、(6b)では、目的語からの外置要素 *from Chicago* をVP *meet a man at the party* とともに前置しており、文法的である。この対比からも、主語からの外置要素はVPの外にあり、目的語からの外置要素はVP内部にあることが示される。以上をまとめると、外置句は次のような構造上の位置を占めることになる。

(7) a.



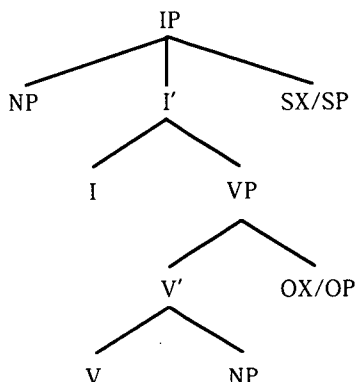
b.



## 1. 2 移動によらない外置句の分析法

これまでのところ、名詞句からの外置は移動操作であることを、特段の議論なしに仮定してきた。「主語からの外置」と「目的語からの外置」の着地点は、それぞれ、(7a, b)に示したとおり、IPとVPである。しかし、外置句はそのS構造の位置に基底生成するという立場をとる研究者もいる。例えば、Rochemont and Culicover (1990), Culicover and Rochemont (1990)は、外置句はS構造の位置に基底生成し、先行詞とは補部原理 (Complement Principle) によって関連づけられていると主張する。Nakago (1994a)は彼らの分析を発展させて、特に二次述語 (secondary predicate) との関連で、拡大補部原理 (Extended Complement Principle) を提案した。これに従うと、外置句と二次述語は次の位置を占めていることが、明示的に示される。主語指向 (subject-oriented) の外置句と二次述語をそれぞれ SX, SP と表し、目的語指向 (object-oriented) の外置句と二次述語をそれぞれ OX, OP と表すことにすると、それらの構造上の関係は、(8) のようになる。<sup>2)</sup>

(8)



この構造が与えられ、拡大補部原理 (9) が与えられれば、外置句と二次述語とそれらの関連要素 (associate) との関係性を正しく予測することができる。<sup>3),4)</sup> SX/SP の関連要素は IP の指定部位置にある主語 NP であり、OX/OP の関連要素は V の補部位置にある目的語 NP である。

(9) 拡大補部原理 (Extended Complement Principle)

$\alpha$  が  $\beta$  の関連要素であるのは、 $\alpha$  と  $\beta$  が相互統御の関係にあるときのみである。

(ただし、 $\alpha, \beta = X^{\max}$ )<sup>5)</sup>

二次述語と外置句を並行的に扱うことの利点は、その複雑な共起制限に統一的な説明を与えられることである。二次述語との共起に関する問題は、後で重名詞句転移との共起についても取り上げることにする。<sup>6)</sup>

## 2. 重名詞句「移動」の局所性について

1節では、名詞句からの外置は移動操作ではないという分析を行った。2節では、重名詞句転移に対しても、同様の説明が成り立つことを見ていく。ここでは、平田 (1995) に基づき、重名詞句の「移動」を意味関係の局所性に帰すことにする。

### 2. 1 移動によらない重名詞句転移の分析法

重名詞句転移は移動操作によるものではないという議論を行うことは、ミニマリスト・プログラムの点からも望ましいものである。Chomsky (1993) の提唱するミニマリスト・プログラムの枠組みでは、移動は移動される要素自身の形態的素性を照合 (check) するための最終手段 (last resort) として適用され、このことを先延ばしの原理 (Greedy Principle) と呼んでいる。この原理によれば、移動はつねに素性の照合のために行われ、形態的な素性の照合が目的では

ない移動はすべて排除されることになる。しかし、これまで移動現象として説明を与えられてきたもののなかには、形態的素性の照合が目的とは考えられないものが多くある。1節で取りあげた名詞句からの外置も、この節で取りあげることにする重名詞句転移もそのような移動である。

具体例を挙げて考察してみることにしよう。重名詞句転移は、すでに(3)、(4)で見たように、(3a-b)からそれぞれ(4a-b)を派生する。ここで、(3)および(4)を、それぞれ(10)、(11)として繰り返しておく。

- (10) a. He attributed the fire which destroyed most of my factory to a short circuit.  
 b. He threw the letter which he had not decoded into the wastebasket.
- (11) a. He attributed to a short circuit [the fire which destroyed most of my factory].  
 b. He threw into the wastebasket [the letter which he had not decoded].

移動操作によって、(10)の二つの文と(11)の二つの文を関連づけるには、問題点はいくつかある。まず、先延ばしの原理が正しいとするなら、移動が適用されている(11a)、(11b)の文はこの原理に違反していることになり、非経済的な派生として排除されてしまうことが予測される。しかしながら、実際は(11)の二つの文は文法的であり、完全に容認される。したがって、重名詞句転移という文法操作を認めることはミニマリスト・プログラムの考え方からは望ましくない。2. 2節では、重名詞句転移に課せられる制約の点から、重名詞句転移は移動操作であるという分析方法が望ましくないものであることを見ていく。

## 2. 2 重名詞句転移の局所性

重名詞句転移は、その基本的な性質として、他の移動、つまり、形態的な素性の照合が目的であるwh移動やNP移動に課せられる一般的な制約よりも、はるかに厳しい制約を受けることが知られている<sup>7)</sup>。例えば、wh移動と異なり、重名詞句移動は節を越えて適用することができない(cf. Emonds 1976)。(12)はこのことを示している。

- (12) a. \* Who do you think [<sub>CP</sub> t' that John loves t]?  
 b. [<sub>CP</sub> t' That he has sent t to his mother] is obvious [every letter he has ever received].

(12a)ではwh句が節を越えて移動することができるのに対して、(12b)では重名詞句が節を越えて移動することができない。このことは、重名詞句転移が(12b)に示したようなCP指定部位置を脱出口(escape hatch)として利用する移動が許されないことを示している。

次に、NP移動とは異なり、重名詞句転移はVPの外まで移動を適用することができない。

- (13) a. The dam was [<sub>VP</sub> built t by a beaver].  
 b. \* Eleanor [<sub>VP</sub> bought t] apparently [brand new drapes for the whole house].  
 c. ?\* John [<sub>VP</sub> gave t to Mary] in London [a book about Middle Ages].

((13b): Johnson 1985: 85)

(13b, c) では、IP に属すると考えられる副詞表現 (apparently, in London) の右に重名詞句が現れており、非文法的となっている。このことから、重名詞句は VP の外側に現れてはならないことになる。

連続循環移動についても重名詞句移動はより厳しい制約を受けている。Chomsky (1986) は、wh 移動は (14) に示すように VP 付加を経て連続循環的に生成されると仮定している。一方、重名詞句転移は、通常、(15) に示したように、重名詞句が移動によって VP の右節点に付加すると考えられている。

(14) Who did John [<sub>VP</sub> t' [see t]]?

(15) John [<sub>VP</sub> [gave to Mary] a book about Middle Ages].

それでも、(13b, c) で見たように、重名詞句を VP の外側にまで移動させることはできないことから、重名詞句転移は wh 移動とは異なり、連続循環的 (successive cyclic) な移動の適用も容認されないことになる。

さらに、前置詞句の目的語はときとして wh 移動を許すのに対して、重名詞句転移は前置詞句の目的語には適用されることはない。

(16) a. Which table did you put the book [on t] yesterday?

b. \* I put it [on t] yesterday [every table in the living room].

(Johnson 1985: 86)

ここまで見てきた対比は、重名詞句転移には、移動に課せられていると考えられる下接の条件や空範疇原理などの一般的制約よりも、はるかに厳しい制約が課せられていることを示している。これまでの制約をまとめると (17) のようになる (cf. 平田 1995: 79)。

(17) 重名詞句転移は

- a. CP 指定部を脱出口 (escape hatch) として用いることはできない。  
 b. 移動は動詞句内に限定される。  
 c. 連続循環的移動は適用できない。

d. 前置詞の目的語には適用できない。

しかし、(17) の制約だけで充分ではない。動詞句内での語順の入れ替わりは名詞句だけではなく、Williams (1994) が指摘するように、動詞 say の二つの補部 PP と CP、それに付加詞である副詞句の語順はかなり自由に入れ替わる。

- (18) a. I said [that I was leaving] [to Bill] [yesterday].  
 b. I said [that I was leaving] [yesterday] [to Bill].  
 c. I said [yesterday] [that I was leaving] [to Bill].  
 d. I said [to Bill] [yesterday] [that I was leaving].  
 e. I said [to Bill] [that I was leaving] [yesterday].  
 f. I said [yesterday] [to Bill] [that I was leaving].

(Williams 1994: 186)

ここで、(18) のいずれかが基底となり他が重名詞句転移のような移動操作によって生成されたものであると仮定すると、先に重名詞句転移について指摘したのと同じ問題が生ずる。つまり、(19) のように、CP 指定部を脱出口として用いることによって、節を越えた移動を適用すると、非文法的となる。

- (19) \* [<sub>CP</sub> t' That I said [that I was leaving] t [yesterday]] surprised Mary very much [to Bill].

重名詞句転移と (18) に見られる移動現象は、移動している句が wh 句ではなく、さらに移動された位置が A' 位置である、という点で共通している。この点から、(17) の規定は、「重名詞句転移」について述べたものではなく、「wh 句ではない補部の A' 移動」について規定したものであると解釈しなくてはならない。

しかし、さらに平田 (1995) はこれでも十分ではないことを話題化 (topicalization) を根拠に述べている。話題化は (20) に見られるように VP を越えた移動が可能であり、しかも、この操作は wh 句ではない補部の A' 移動であるので、重名詞句転移や (18) に見られる移動とは厳密に区別されなくてはならない。

- (20) a. Mary, John [<sub>VP</sub> loves t].  
 b. To John, Mary [<sub>VP</sub> gave the book t].

話題化は、左方への移動操作であると一般的には考えられるので、最終的には、次のようなき

わめてアド・ホックな移動条件が必要であることになる (cf. 平田 1995: 80)<sup>8)</sup>

- (21) wh 句ではない補部の右方への A' 移動は、
- a. CP 指定部を脱出口 (escape hatch) として用いることはできない。
  - b. 移動は動詞句内に限定される。
  - c. 連続循環的移動は適用できない。
  - d. 前置詞の目的語には適用できない。

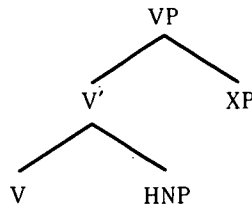
以上、この節では重名詞句転移 (あるいは wh 句ではない補部の右方移動) という移動操作を認めることによって、きわめて特異な局所性の設定が必要であることが示された。

### 2. 3 意味関係原理

前節では、重名詞句転移が移動操作であるという立場をとった場合に、きわめて特異な局所性の設定が必要であることを見た。この節では、そのような移動操作を認めない立場から、重名詞句転移の示す現象を説明することを試みる。

ここで、重名詞句転移の構造を改めて検討することにする。重名詞句転移とは、(22) のように V の補部位置に生成された重名詞句 HNP を、付加部である XP 位置に移動する操作である。

(22)



重名詞句転移という移動操作を仮定しない場合には、XP に基底生成された名詞句が、直接 V から  $\theta$  役割付与される必要がある。そこで、(23) のような原理を設けることにする。<sup>9).10)</sup>

(23) 意味関係原理

$\theta$  役割付与子 V は、それが m 統御 (m-command) し、かつ最大投射が介在しない最大投射 XP を  $\theta$  役割付与できる。

(23) の意味関係原理が与えられれば、(22) において V の補部位置に基底生成した重名詞句 HNP が、主要部 V によって、 $\theta$  役割を直接付与される。



(23) の原理はまた、前節で概観した重名詞句移動の局所性をすべて説明できる。それでは、前節 (21) で見た重名詞句転移に課せられる制約が、意味関係原理 (23) によって、どのように説明されるかを見ておくことにする。

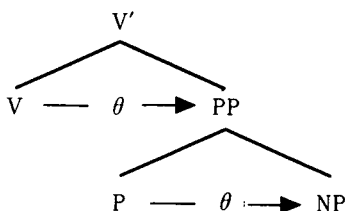
まず、(21a, c) についてである。ここでは、重名詞句転移は移動操作ではないと考えるので、CP 指定部を脱出口として用いたり、連続循環的移動を適用する必然性はそもそもなくなるので、もはや問題とはならない。つぎに、(21b) についてである。すでに、(12)、(13) で見たように、重名詞句は節はもちろんのこと動詞句からも抜き出すことができない。ここで、非文法的な (12b)、(13b-c) を (24) として繰り返しておくことにする。

- (24) a. \* [CP t' That he has sent t to his mother] is obvious [every letter he has ever received].  
 b. \* Eleanor [v<sub>P</sub> bought t] apparently [brand new drapes for the whole house].  
 c. ?\* John [v<sub>P</sub> gave t to Mary] in London [a book about Middle Ages].

ここでの主張は、重名詞句転移は移動操作ではなく、重名詞句が意味関係原理のもとで、動詞の右節点の位置に基底生成しているというものであった。もしこれが正しければ、(21b) の制約は保証されることになる。すなわち、(12b)、(13b-c) (= (24)) が非文法的であるのは、重名詞句が VP の外側に生成されており、意味関係原理 (23) によって、 $\theta$  基準の違反であるためであると正しく排除することができるのである。

(21d) の制約は次のように説明することができる。まず、(25) の構造を考えてみよう。

(25)



(25) において、前置詞句 (PP) が動詞 (V) からの  $\theta$  役割付与を介し、前置詞 (P) が事実上の  $\theta$  役割付与子であると考えことにする。そうすれば、 $\theta$  役割付与子である前置詞句の外に重名詞句が生成されてはならないことが説明される。

このように、重名詞句転移は移動移動操作ではないという仮定のもとで、(23) の原理を用い、重名詞句転移のよく知られている制約がすべて説明される。

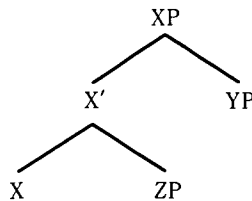
2. 4 意味関係原理におけるm統御の概念と二重目的語構文、動詞句内主語仮説との関連

「転移」された重名詞句の認可条件として、意味関係原理 (23) を提案したが、意味関係原理は重名詞句転移にのみ成立するわけではない。この原理は、 $\theta$  役割付与に関する一般的な原理であると考え、(26) のように再定式化してみよう。

(26) 意味関係原理

ある  $\theta$  役割付与子 X は、それが m 統御 (m-command) し、かつ最大投射が介入しない最大投射 YP を  $\theta$  役割付与できる。

(27)



(26) が正しいとすると、意味関係原理は、(18) で見たようなある動詞の二つの補部 PP と CP、それに付加詞である副詞句の語順がかなり自由に入れ替わる例に対しても成立する。<sup>11)</sup> 注意しなくてはならないのは、 $\theta$  役割付与は、従来、姉妹関係に基づいて規定されていたのに対して、ここでは m 統御の関係に基づいて規定されていることである。もし、二項枝分かれの構造を仮定すれば、(28) のような二重目的語構文や補部を二つ取る動詞との関係において、m 統御の概念は必要になると思われる。なぜなら、(27) における YP 位置に、二つ目の補部が生起するとすれば、その二つ目の補部はその位置で  $\theta$  役割を付与されているはずだからである。<sup>12)</sup>

- (28) a. John gave the book [to Mary].  
 b. John sent the letter [to Mary].  
 c. John told us [jokes].  
 d. John said to me [that he likes me].

また、Kitagawa (1986), Kuroda (1986), Sportiche (1988), Speas (1990) などで主張されている動詞句内主語仮説 (VP-internal subject hypothesis) が正しいとすれば、 $\theta$  役割付与は、主要部が指定部と補部に対して行うことになる。すると、この関係は姉妹という概念ではなく、m 統御の概念に基づいてとらえた方がよいということになり、意味関係原理における m 統御の位置づけを支持する証拠となる。

### 3. 右方移動要素の位置

これまでの議論によると、外置句の構造上の位置は拡大補部原理によって、また、転移された重名詞句の構造上の位置は意味関係原理によって決定されることになる。ここで注目しなくてはならないのは、拡大補部原理と意味関係原理が成立するためには、m統御が決定的な要因となるということである。ここで、拡大補部原理と意味関係原理をそれぞれ、(29)、(30)として繰り返しておこう。

(29) 拡大補部原理

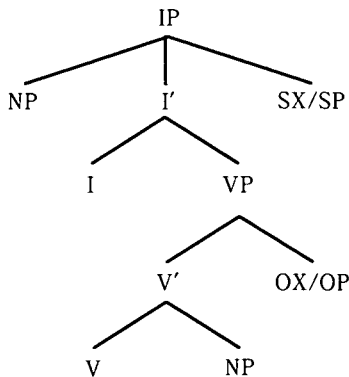
$\alpha$  が  $\beta$  の関連要素であるのは、 $\alpha$  と  $\beta$  が相互 m 統御の関係にあるときのみである。  
(ただし、 $\alpha, \beta = X^{\max}$ )

(30) 意味関係原理

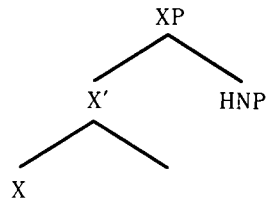
ある  $\theta$  役割付与子 X は、それが m 統御 (m-command) し、かつ最大投射が介在しない最大投射 YP を  $\theta$  役割付与できる。

議論の中心にしている構造は、外置句に対しては (31a)、重名詞句 (heavy NP) に対しては (31b) の構造である。(31b) 中の HNP は重名詞句を表す。<sup>13)</sup>

(31) a.



b.



ここで、外置句、二次述語と重名詞句転移との構造上の位置を決定するために、次の (32) について考察してみよう。

(32) a. John never eats \_\_\_ raw [fish over two days old]. (OP-HNP)

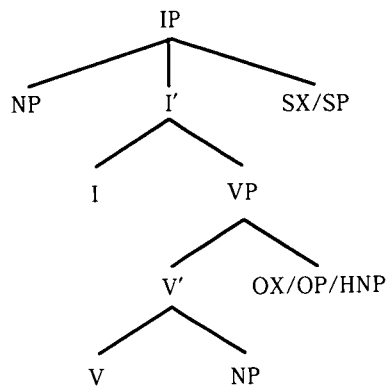
b. \* John left \_\_\_ angry [the reception for the ambassador from Ulan Bator].

(SP-HNP)

(Larson 1988: 19)

(32a) は、HNP が (VP に付加する) 目的語指向二次述語 OP を越えられることを示し、(32b) は、VP に付加する目的語重名詞句 HNP が (IP に付加する) 主語指向二次述語 SP を越えられないことを示している。このことと、(31a, b) の構造を考慮に入れると、主語指向の外置句および二次述語と重名詞句の構造上の位置関係は、次の (33) のようになっているはずである。

(33)



しかし、このままでは、(33) の構造を支持するための議論は充分でなく、問題点も指摘できる。まず、SP/OP と HNP の先行関係について見ていくことにしたい。(32a, b) 中でそれぞれ OP と HNP, SP と HNP を入れ替えた次の (34a, b) は容認される。

- (34) a. John left [the reception for the ambassador from Ulan Bator] [angry].  
 b. John never eats [fish over two days old] [raw].

これらの文の文法性は、(33) の反例となるものではないが、(34a) の重名詞句 the reception for the ambassador from Ulan Bator が動詞の補部の位置ではなく、V' の姉妹の位置にあるという独立した根拠はない。また、(34b) の fish over two days old についても同様で、転移された重名詞句と考えにくい。この問題に関しては、未解決のままにしておくことにする。SX と HNP との関係についても同様である。次の例を考えてみよう。

- (35) a. Someone brought [beans cooked in oil imported from Italy] [who we didn't know].  
 b. \* Someone brought [who we didn't know] [beans cooked in oil imported from Ita-

ly].

(SX-HNP)

(35a) の *beans cooked in oil imported from Italy* を転移した重名詞句であるとは考えにくい。OX と HNP の各要素の線形順序が関わる (36) のような例についても考察する必要がある。

(36) a. \* John told a man yesterday [some very outrageous stories about Mary] [that he met at the party]. (HNP-OX)

b. John told a man yesterday [that he met at the party] [some very outrageous stories about Mary]. (OX-HNP)

(Rochemont and Culicover 1990: 174)

(36a) は (33) の反例となってしまう。したがって、(33) の構造を維持するためには、OX と HNP の線形語順に関する何らかの規定が必要となってしまう。OX と HNP の線形順序の考察には、二重目的語構文の構造という複雑な問題が密接に関わってくるため、この論文では問題点を指摘することにとどめ、これ以上議論を進めないことにする。このような問題点があるものの、(32), (34) – (35) を線形順序から見た場合、いずれも (33) の構造を否定するものではないことは明らかである。

#### 4. ま と め

この論文では、従来右方移動構文として扱われた名詞句からの外置と重名詞句転移を取り上げ、それらが移動によらずに生成されることが可能であることを主張し、その構造を (33) に示した。右方移動構文は、m統御という統一的条件のもと、名詞句からの外置は拡大補部原理によって、重名詞句転移は意味関係原理によって認可された。この主張には、二次述語の振る舞いからも支持が得られた。動詞に直統する重名詞句の取り扱いについての問題が残るが、これは今後の課題にしたいと思う。

#### 注

- 1) 主語からの外置句が IP だけではなく、VP に付加していてもよく、その両方の可能性があることを Rochemont and Culicover (1990), Culicover and Rochemont (1990) は示唆している。彼らの分析に対する反論は、Nakajima (1990), Erteschik-Shir (1990) を参照のこと。
- 2) (7) の構造と比較せよ。二項枝分かれではなく、三項枝分かれ構造を取る (8) に対しては、概念的な問題があるかもしれない。この問題に対する議論については、中郷 (1996b) を参考のこと。注 6 も見よ。三項枝分かれ構造を支持する独立した根拠については、天野 (1995) を参照のこと。
- 3) 関連要素という術語がここで意味するものについて注意する必要がある。ここで関連要素と呼ぶのは、外置句の「先行詞」とも呼ばれる一般的な用法での関連要素に、二次述語の「主語」を加えたものである。
- 4) Rochemont and Culicover (1990: 35) では、補部原理を次のように定義している。

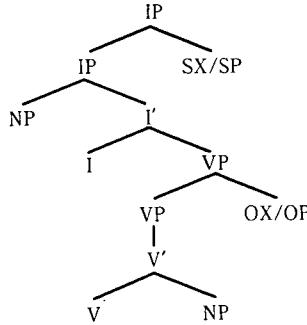
- (i)  $\beta$  is a potential complement of  $\alpha$  ( $\alpha, \beta = X^{\max}$ ), only if  $\alpha$  and  $\beta$  are in a government relation.
- 5) 相互m統御については, Chomsky (1986: 8) の定義を用いる。

(i)  $\alpha$  m-commands  $\beta$  iff  $\alpha$  does not dominate  $\beta$  and every maximal projection that dominates  $\alpha$  dominates  $\beta$ .

- 6) この論文では, 主に (8) の構造に基づいて議論を進めていくが, 中郷 (1996a, b) で示した代案も有益であると思われるので, ここにその主張を簡単に述べておくことにする。二項枝分かれ構造しか認めないとすると, (8) の構造に表される主張と同じ効果を得るために, カバー (cover) の概念を用いたm統御を定義すればよい。拡大補部原理で用いたm統御との混乱を避けるために, m関連づけられている (m-related) という用語を用いることにすれば, その定義は次のようになる。

(i)  $\alpha$  is m-related with  $\beta$  iff  $\alpha$  does not dominate  $\beta$  and every maximal projection that covers  $\alpha$  dominates  $\beta$ .

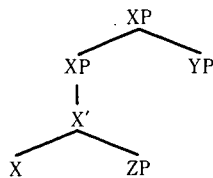
「 $\alpha$  が  $\beta$  の関連要素であるのは,  $\alpha$  と  $\beta$  が m関連づけられているときである」と拡大補部原理を修正すれば, 二項枝分かれの下でも, 両者の関係は正しくとらえることができる。その構造上の関係は, 次の通りである。



しかし, ここでは句構造は二項枝分かれでなくてはならないのか, (8) のような娘付加の立場を認めるのかについては未解決の問題とし, 場合に依りてその両方の構造を考慮に入れて議論を進めていくことにする。

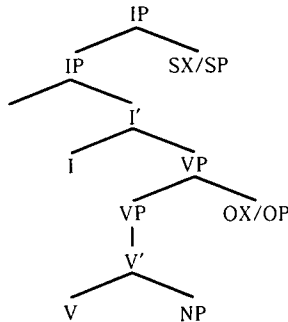
- 7) 議論の詳細については, 平田 (1995) を見よ。
- 8) 名詞句からの外置もまた, 右方移動ではなく左方移動であるとする分析方法もある。Kayne (1994) では, 外置句に対して, 線形対応公理 LCA (linear correspondence axiom) に基づき, 移動を介しての右方付加はあり得ず, 外置句以外の要素が左方に移動することが示されている。詳しくは, Kayne (1994) を参照のこと。
- 9) (22) は (8) と同じく, 娘付加の立場を取っていることに注意せよ。また, 平田が指摘するように付加詞が (22) のような  $X'$  の姉妹位置ではなく, 次の (i) のような最大投射に付加された位置に生成されると仮定すれば, (23) の意味関係原理には修正が必要となると思われる。

(i)

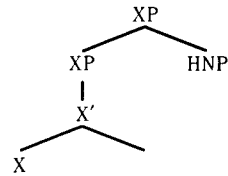


- (23) の修正には, Chomsky (1994: 30) の包含 (containment) の概念を用いた修正が可能であると思われる。中郷 (1996b: 186-7) は外置句の振る舞いに対して同様の議論をしている。
- 10) 意味関係原理は, 他の原理に違反しないときのみ成立する。他の原理として考えられるのは, 主要部パラメーター (head parameter) である。Fukui (1993), Nakago (1994b: 64) を参照のこと。主要部先行 (head initial) である英語では, 動詞句の左側への重名詞句の生成は容認されない。
- (i) \* He [<sub>NP</sub> the fire which destroyed most of my factory] [<sub>VP</sub> attributed to a short circuit].
- 意味関係原理と同様の趣旨の提案は, Drescher and Hornstein (1979), Falk (1983), Gazder, Klein, Pullum, and Sag (1985), Williams (1994) などにおいて, それぞれ, 痕跡理論, 語彙機能文法, 一般句構造文法, 主要部駆動句構造文法の立場からされている。
- 11) 規範的な語順は, 主要部パラメーターによって決定すると考える。注10を参照のこと。「補部-付加詞」「句-節」の語順がより好まれるが, このことはここでは扱わない。Pollard and Sag (1987), Williams (1994) などを参照のこと。
- 12) Larson (1988) 流の VP 殻 (VP-shell) はここでは採用しない。注6で述べたように, ここでは, 二項枝分かれを認める立場と娘付加を認める立場の両方を考慮に入れて議論を進めている。もし, 三項枝分かれ構造が正しいとしても, 意味関係原理の定義に用いたm統御の概念を変更する必要性はない。天野 (1995) は二重目的語構文における三項枝分かれの必然性について議論している。
- 13) 二項枝分かれ構造のもとでは, (31a), (31b) はそれぞれ次の (ia), (ib) のようになる。これらに対する接近法については, 注6および9を参照のこと。

(i) a.



b.



## 参考文献

- 天野政千代 (1995) 「英語の格標識に関する通時的・共時的研究 (6) ——二重目的語構文の構造——」, 『名古屋大学文学部研究論集』文学41, 85-112.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*, Cambridge, Massachusetts, MIT Press.
- Chomsky, N. (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," in K. Hale and J. Keyser (eds.), *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, 1-52, Cambridge, Massachusetts, MIT Press.
- Culicover, P. W. and M. S. Rochemont (1990) "Extrapolation and the Complement Principle," *Linguistic Inquiry* 21, 23-47.
- Dresher, B. E. and N. Hornstein (1979) "Trace Theory and NP Movement Rules," *Linguistic Inquiry* 10, 65-82.
- Emonds, J. E. (1976) *A Transformational Approach to English Syntax*, London, Academic Press.
- Erteschik-Shir, N. (1990) "Review of Rochemont and Culicover (1990)," *Journal of Linguistics* 27, 525-532.
- Falk, Y. N. (1983) "Constituency, Word Order, and Phrase Structure," *Linguistic Analysis* 11, 331-360.
- Fukui, N. (1990) "Parameter and Optionality," *Linguistic Inquiry* 24, 399-420.
- Gazder, G., E. Klein, G. K. Pullum, and I. Sag (1985) *Generalized Phrase Structure Grammar*, Oxford, Basil

Blackwell.

- 平田一郎 (1995) 「照合理論と右方移動」, 高見健一 (編) 『日英語の右方移動構文——その機能と構造——』, 75-91, 東京, ひつじ書房.
- Johnson, K. B. (1985) *A Case for Movement*, Doctoral dissertation, MIT.
- Kayne, R. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, Cambridge, Massachusetts, MIT Press.
- Kitagawa, Y. (1986) *Subjects in Japanese and English*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts.
- Kuroda, S.-Y. (1988) "Whether We Agree or Not," *Papers on the Second International Workshop on Japanese Syntax*, CSLI, Stanford University.
- Larson, R. (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- Nakago, K. (1994a) "A Comprehensive Approach towards Extraposition and Predication," *IVY* 27, 107-124.
- Nakago, K. (1994b) "Remarks on Subject-Oriented Elements," *Linguistics and Philology* 14, 59-69.
- 中郷 慶 (1996a) 「二項枝分かれと拡大補部原理」, 『市邨学園短期大学 開学30周年記念論集』, 283-302, 市邨学園短期大学.
- 中郷 慶 (1996b) 「外置句と二次述語の解釈について」, 中野弘三博士還暦記念論文編集委員会 (編) 『言語の深層を探ねて』, 179-189, 東京, 英潮社.
- Nakajima, H. (1990) "Against the Interpretive Nesting Requirement," *Metropolitan Linguistics* 10, 40-54.
- Rochemont, M. S. and P. W. Culicover (1990) *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Ross, J. R. (1986) *Infinite Syntax*, New Jersey, Norwood.
- Speas, M. (1990) *Phrase Structure in Natural Language*, Dordrecht, Kluwer Academic Publishers.
- Sportiche, D. (1988) "A Theory of Floating Quantifiers and its Corollaries for Constituent Structure," *Linguistic Inquiry* 19, 425-449.
- 鈴木右文 (1995) 「英語の右方移動の統語論」, 高見健一 (編) 『日英語の右方移動構文——その機能と構造——』, 55-74, 東京, ひつじ書房.
- Williams, E. (1994) *Thematic Structure in Syntax*, Cambridge, Massachusetts, MIT Press.